

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2008年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学研究科	比較文明学	専攻
指導教員	所属・職名			氏名		
	文学研究科・教授			春原 憲一郎 印		
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>		個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 名		
研究課題名	台湾における日本語文芸活動をめぐる語りについて					
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年			氏名		
	文学研究科・比較文明学専攻・博士後期課程6年			今井 祥子 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年			氏名		
研究期間	2008 年度					
研究経費	200 千円					

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、戦後台湾における日本語文芸活動、より具体的には短歌、俳句の「愛好」という〈営み〉をめぐる語りのありようについて考察すること目的とする。対象となりうる語りの収集、資料化が基礎作業となる。また、語りから「理解」のかたちを分析するとともに、「理解」という知的営為じたいがその自明性において孕んでいるものを批判的に検討することによって、自/他、関係を固定化させることを問うとともに、この〈営み〉をめぐる語り、そしてこの〈営み〉をめぐる「かかわり」をよりひらいてゆくことを目指す。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[台湾] [日本語文芸] [語り]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

- I. 基礎的作業として、対象となりうる語りの収集をおこなった。また、それらを整理、分類し、資料化した。(詳細は「戦後台湾における日本語短詩型文芸(短歌・俳句・川柳)活動に関する記述〔書評、エッセイ、学会報告、論考、書籍等〕」として博士論文に添付)
- II. Iを踏まえ、語りについて考察した。(詳細は博士論文に記載)

この〈営み〉については、総じて、日本、台湾いずれにおいても高い関心を集めているとはいえない。そのような全体的な状況のなかで、集中的に語りがうみだされた時期がある。それは1990年代の日本社会における、いわゆる〈台湾万葉集〉ブームの一時である。この時期に生産された語りは日本人によるものを主とし、また研究者による専門的論述は相対的に少数である。そしてこのブームの終焉とともに、日本では、この〈営み〉については実質的に語り終えられているという様相がみられる。他方、2000年前後から、また別の文脈、関心、角度、立場からこの〈営み〉をめぐる語りが生みだされている。これらは台湾人研究者によるものを主とする。

以下、1) 日本という場から①1993年以前、2) 日本という場から②1993年以後、3) 台湾という場から、に分け、それぞれの概要について述べる。

1) 日本という場から①1993年以前

この〈営み〉は日本において、また当地台湾においても、関係者のあいだでのみ知られるものであった。戦後台湾に結成され、担い手をかえながらその活動を続けてきた短歌、俳句グループ、台北歌壇(1967年～)および台北俳句会(1970年～)、またその後につくられた短歌、俳句、川柳の会、また諸個人は、日本の短歌、俳句関係者とそれぞれに交流関係——専ら私的領域を場とする安定的閉鎖的循環経路がなす「環」——をつくっている。この時期の語りはそうした交流関係を背景に日本の歌誌や俳誌等へ書き記されたものを主としている。一例として次のようなものがある。

- ・小林敏郎(土志朗)、1968年7月、『短歌新生』(洪秋恵作品特集号)、仙台：短歌新生
- ・東早苗、1970年11月、「一粒の種 台湾の俳句」、『七彩 俳句と随筆』、東京：七彩発行所
- ・片川進、1976年8月～1979年7月、「連載 俳句の国際化」、『早苗』、広島：早苗発行所

この時期の語りは流通範囲の限定されるものであった。こうした時期に安岡章太郎によって記述され、マスメディアを介して発表された一つのエッセイがある。

- ・安岡章太郎、1972年5月、「二冊の本 黄靈芝」、『週刊小説』、実業之日本社

これは、短歌、俳句の〈営み〉に直接触れるものではないものの、戦後台湾における日本語による文芸の「愛好」に接して述べているものであること、またこの〈営み〉が日本社会にたいして「呼びかけ」となる際、いわばひっかかりとなる「日本語によるということ」(意図の有無にかかわらず最も届いてしまうものであり、それゆえに回収にもまた「理解」の中断にも繋がりがうる可能性をもつもの)にたいし一つの応じ方を示している点で、参照されるべき語りであると思われる。また安岡の語りは、横井庄一氏の帰国に日本社会が得た“かつての日本“が”生き残ってある“という「発見」を引き合いに出しており、1970年という時点での戦後日本の記憶の問題(継承、断絶、忘却、管理等)もあわせて浮上させている。

2) 日本という場から②1993年以後

1993年、日本社会には“台湾に生き残っている日本、日本語“というトピックに関心をむけさせる「力」をもつ二つの語りがあった。両者はいずれも「発見」を報告するものであった。一つは司馬遼太郎によるものであり、もう一つは大岡信によるものである。司馬はこの年、『週刊朝日』誌において「街道をゆく台湾紀行」の連載を開始し、そのなかで今日の台湾に短歌、俳句の会があること、作品について言及した。他方、大岡は、『朝日新聞』紙上において休載していた「折々のうた」を再開させ、その際、自身の「感動」とともに「台湾短歌」を紹介した。

- ・司馬遼太郎、1993年9月、「街道をゆく 台湾紀行(9) 南の俳人たち」、『週刊朝日』9月3日号
- ・大岡信、1993年5月9日～6月6日、「折々のうた」、『朝日新聞』

大岡による19回にわたる紹介は大きな反響を得、その「台湾短歌」を収録する台湾で編まれた無名の冊子(自費出版による非売品)が日本の大手出版社から復刻刊行されることとなる。それが『台湾万葉集(正・続)』(集英社)である。これに関連書籍の刊行、ドキュメンタリー番組の制作放映などがつづき、〈台湾万葉集〉という語りがマスメディアを介してさらに流通していった。このような事態に“関係者のあいだでのみ知られるもの“というそれまでの状況が変化する。そしてこの変化は語りのありように影響をもたらす。この時期の語りは、その語りのスタイル、媒体を問わず、『台湾万葉集』への／からの言及というかたちをとり、また〈台湾万葉集〉に、戦後台湾における短歌、俳句の〈営み〉を代表させる、あるいは重ねるといった特徴をもつ。また、書評やエッセイといった記述スタイルをとるものが相対的に多い。大岡が指摘しているように、歌壇からの積極的な語りはそのスタイルを問わず多くない。また、その領域を問わず研究者による専門的論述は管見の限りきわめて限られている。以下は論考のスタイルをとるものである。

研究成果の概要 つづき

- ・小笠原賢二、1995年6月、「短歌時評⑥ 植民地文学としての短歌」、『歌壇』、本阿弥書店
- ・三嶋健男、1995年7月、「台湾に於ける短歌」、『天理台湾研究会年報』4
- ・彦坂美喜子、1996年7月、「『台湾万葉集』・その混成の場所」、『詩と評論 黙示録』17、岐阜：なわた書店
- ・内野光子、1996年8月、「植民地における短歌とは 『台湾万葉集』を手掛かりに」、『八月十五日その時私は 記録 8月15日を語る歌人の集い』、短歌新聞社
- ・河路由佳、1997年10月、「短歌と異文化との接点 『台湾万葉集』をヒントにボーダーレス時代の短歌を考える」、『短歌研究』、短歌研究社
- ・大久保明男、2000年4月、「〈台湾万葉集〉の重みと可能性」、『朱夏』14、せらび書房
- ・河路由佳、2000年8月、「日本統治下の台湾における日本語教育と短歌 孤蓬万里編著『台湾万葉集』の考察」、『人間と社会』11、東京農工大学

これらに共有されているのは、この〈営み〉に受ける「異質な感じ」「意外性」(彦坂 1996:31)であり、それを解くための「植民地下の日本語教育という点から眺めてみた」(三嶋 1995:30)という立場である。ここには一つの「理解」(言説化)のかたちが確認される。すなわち「解」(行為を合理的に説明する原因)の存在を前提にするとともに既存のものとみなし、それを「被植民者」経験に求めるという型である。帝国日本による植民地教育の「成果」を「悲劇」として、あるいは「可能性」として語るも、そのような二項図式による語りじたいが関係を(再)固定化させるという遂行になっていいる。この同一性の対比こそが植民地主義の痕跡のなかで「一番どうしても消えゆかないもの」と酒井(2002)は指摘する。ここには新城(2007)がいう「主体の形而上学」に還元される知の操作、すなわち「対-自的認識論」のなかに閉じられてしまう語りという問題も横たわっている。

3) 台湾という場から

この時期の語りは基本的に日本における〈台湾万葉集〉ブームの後におこされ、また台湾人研究者によるものが主となる。いずれの論述も台湾という場の特性や状況を「理解」に導入させている。ただし台湾においてこの〈営み〉はなお“関係者のあいだでのみ知られるもの”である。

- ・李郁慧、1999年3月『『台湾万葉集』を読む 「日本語人」の文学として』『広島大学教育学部紀要第二部』47
- ・李郁恵、2000年3月「台湾の日本語文学研究 脱周縁化の軌跡」、広島大学博士論文
- ・黄智慧、2002年12月「台湾腔的日本語 殖民後詩歌寄情活動」(中文)、文化研究學會 2002年會「重訪東亜 全球・區域・國家・公民」會議論文、台中：東海大學社會科学院
- ・黄智慧、2003年3月「ポストコロニアル都市の悲情 台北の日本語文芸活動について」、『アジア都市文化学の可能性(大阪市立大学文学研究科叢書第1巻)』、大阪：清文堂出版
- ・クリーマン・フェイ・ユエン〔阮〕(末岡麻衣子訳)、2006年6月、「植民地ノスタルジアの詩 『台湾万葉集』>、「第三章 戦後の日本語文学 在外日本人作家・在日外国人作家を中心に」、『東アジアの文学・言語空間(帝国日本の学知第5巻)』、岩波書店

これらに共通するのは、日本では1990年代以降、台湾においては2000年代以降になってその援用が活発化する、植民地主義、帝国主義をその背景におく「周縁(性)」からの「中心」(体制)に対する批判的視座、思考との関連である。「日本語文学」「ポストコロニアル」「クレオール」が各々鍵語とされるが、問題関心の核とされているのは「主体(性)」である。それまでの語り欠いていた戦後台湾という空間の特性、またこの時期の民主化の動きが反映されているが、その際「日本語によるということ」は体制への「抵抗」あるいは「主体(性)の主張、確認」と翻訳される。ここにおいても「被植民者」経験は重要な「理解」の資源になっている。それは日本語文芸を「愛好」することが「被植民者」ゆえの「素養」の活用であるとして合理化される点にも端的に示されている。ここには「先行する眺め」「『主体』の高み」「『客体』に対する『主体』の意志の戦場」(大杉 1999)らが孕む問題が並存する。

語るとは応答である。また呼びかけである。「他者を『これ』とか『あれ』とか名づけて、ひとつの概念をあてはめること、それはすでに他者に訴えかけることである。わたしは知る(connais)だけではない、わたしはかかわりのうちに入るのである」(E. レヴィナス『困難な自由』)。他方、言語化は分節化、均質化を不可避的にとまなう。また言語化(語り)の現場は表象をめぐる磁場でもある。であるからこそ固定化ではなく流動化が意識される必要がある。「理解」に失敗しつづけること、遅れつづけることにこそ私たちにおける「言語の機能」の可能性がある。

大杉高司、1999、『無為のクレオール』、岩波書店

酒井直樹、2002、「ポストコロニアリズムと様々な同一性の用法について」、『日本近代文学』66

新城郁夫、2007、『到来する沖縄 沖縄表象批判論』、インパクト出版会

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。